

経済・金融 フラッシュ

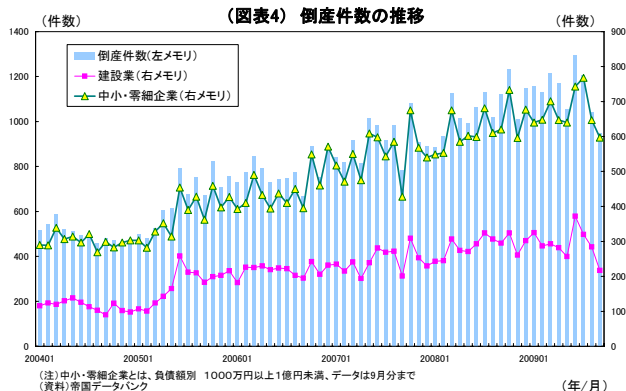
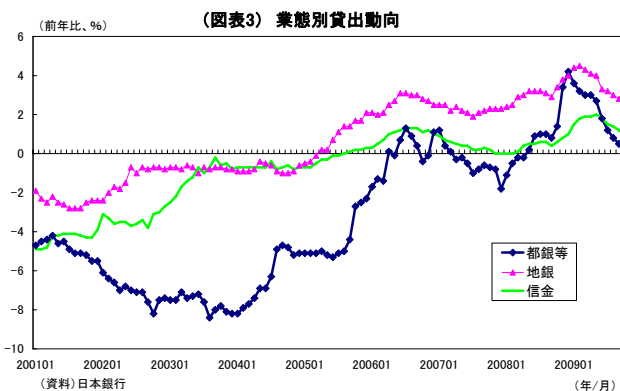
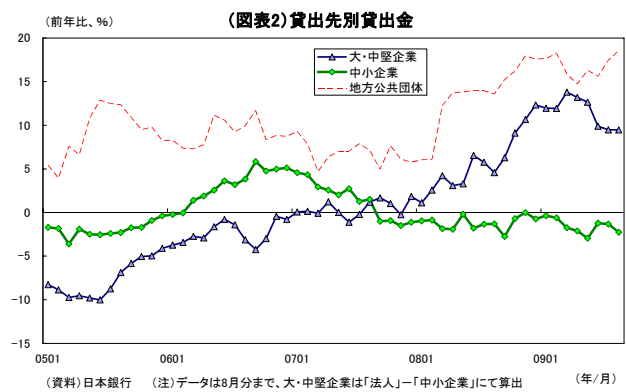
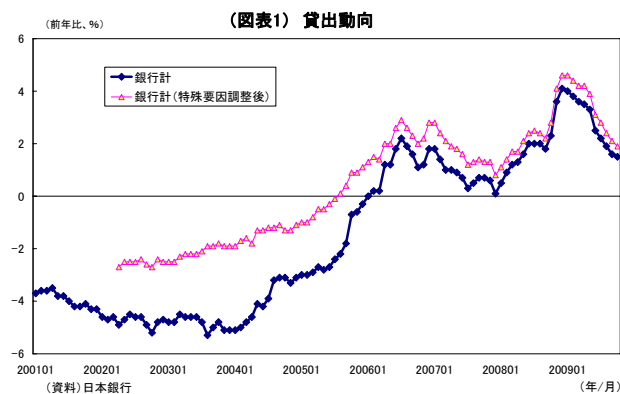
10月マネー動向： 投信にも一部資金還流の動き

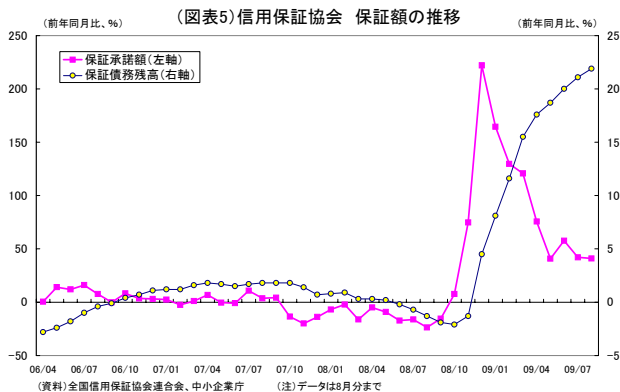
経済調査部門 副主任研究員 上野 剛志

TEL:03-3512-1870 E-mail: tueno@nli-research.co.jp

1. 貸出動向：10ヶ月連続で伸び率が縮小

日銀の貸出・資金吸収動向等によると、10月の銀行総貸出(平残)の前年比伸び率は1.5%(前月改定値は1.6%)と10ヶ月連続で伸び率が縮小した。同水準は2008年4月以来の低い水準となる。業態別に見ると、足元都銀等は下げ止まったが、地銀の低下が続いている。景気低迷の長期化に伴って設備資金等の需要が低迷しており、貸出需要が頭打ちになってきているようだ(図表1~3)。倒産件数が頭打ちからやや減少基調にある点は好材料だが、依然として歴史的に見ると高水準であり、企業の厳しい業況から、貸出需要の低迷は当面続くと考えられる(図表4,5)。

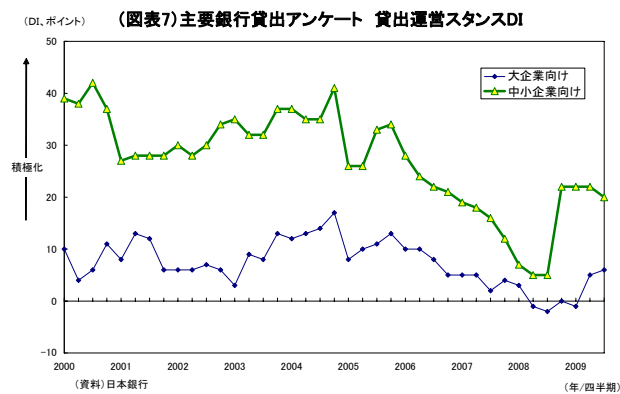
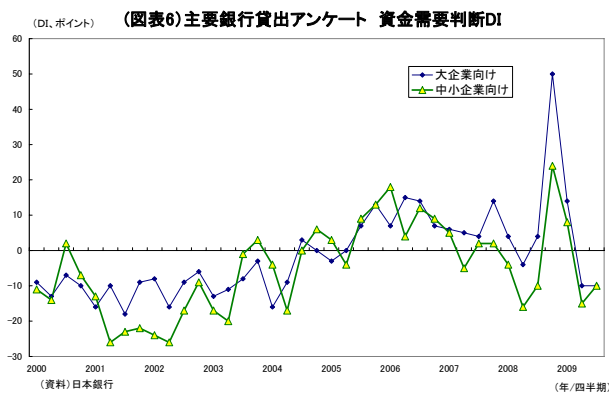




2. 主要銀行貸出動向アンケート調査：資金需要の低迷が続く

主要銀行貸出動向アンケート調査によれば、銀行側から見た 2009 年 7-9 月期の企業の資金需要判断 D.I.は大企業が▲10(前期比横ばい)、中小企業はやや改善したが▲10(前期比+5)と、いずれも低迷が続いている。「設備投資の減少」ならびに「売上の減少(に伴う運転資金の減少)」がその要因である。なお、中小企業の D.I.が前回調査に比べやや高まったことについては、「資金繰りの悪化」による資金需要が最大の要因として挙げられており、前向きな資金需要の結果ではない(図表 6)。

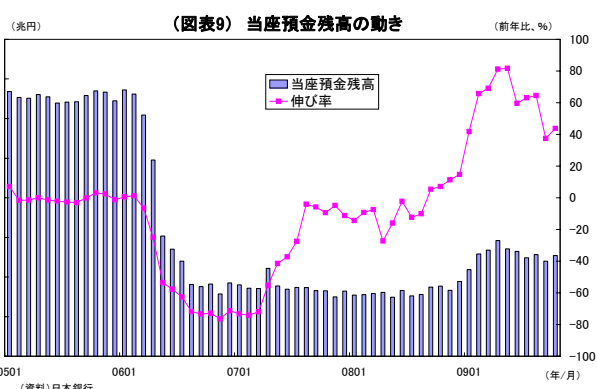
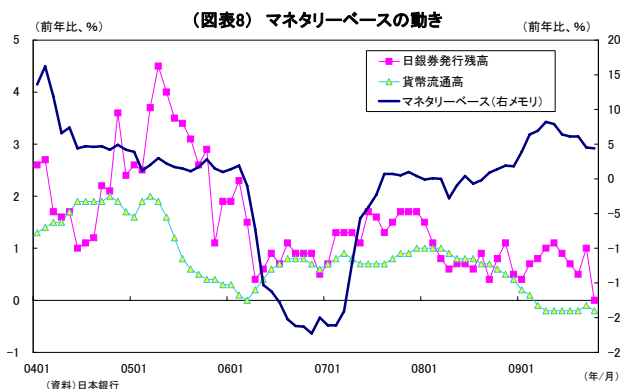
一方、銀行の貸出運営スタンス D.I.は大企業、中小企業ともにプラスを維持しており、銀行としては貸出運営を積極化しているという結果となった(図表 7)。



3. マネタリーベース：14ヶ月連続の前年比プラス

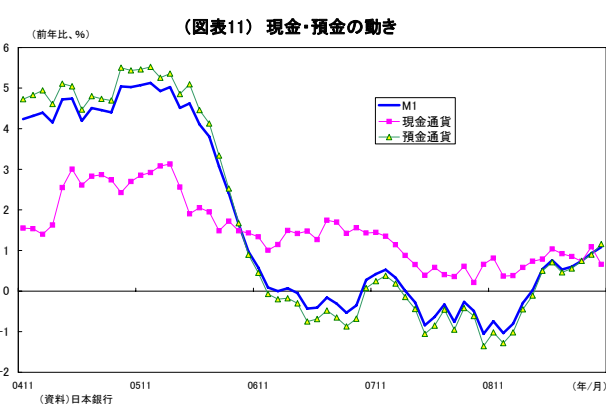
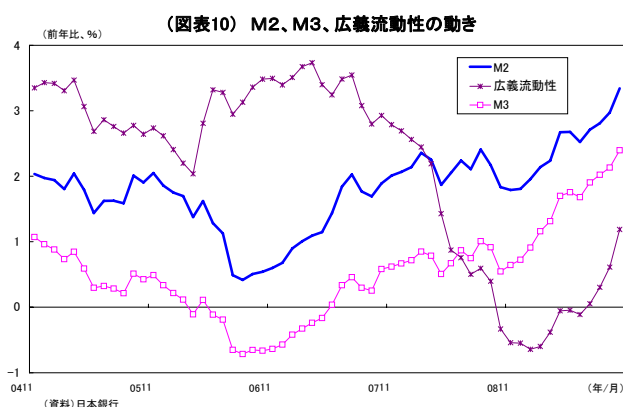
日銀による資金供給量を示す10月のマネタリーベースは、前年同月比4.4%増となった。伸び率は4月の8.2%増をピークに縮小傾向にあるが、14ヶ月連続で前年の水準を上回った。日銀による短期市場への潤沢な資金供給が続いている結果、日銀当座預金残高が前年比43.8%増と比較的高水準を維持している。(図表8,9)

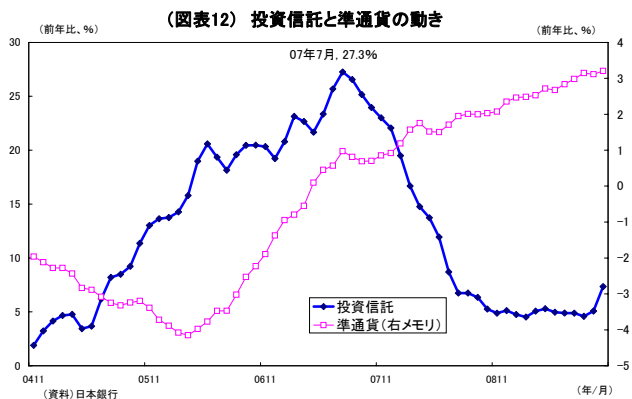
日銀の超低金利政策は当面続くとみられることから、引き続きマネタリーベースの高い水準での推移が見込まれる。



4. マネーストック：マネーは増加傾向強まる、投信にも一部資金還流の動き

通貨供給量の代表的指標である10月のM2(現金、国内銀行などの預金)平均残高は前年比3.3%増(前月は3.0%増)、M3(M2にゆうちょ銀など全預金取扱金融機関の預貯金を含む)は同2.4%増(前月改定値は2.1%増)と、ともに4ヶ月連続で伸び率が拡大、通貨供給量の増加傾向が顕著になってきた(図表10)。定期預金などの準通貨の伸びが拡大を続けていることがこの主因だが、普通・当座預金といった要求払預金も足元増加傾向にある(図表11)。





M3 に投信や外債等を含めた広義流動性も前年比 1.2%増（前月改定値 0.6%増）と伸び率が拡大している。依然としてM2 などの伸びとは乖離があるが、リーマンショック以降 5%程度で低迷してきた投信の伸び率が足元 7.3%と上昇したため、乖離幅は縮小した。準通貨の伸び率拡大にみられるように、リスク回避目的による安全資産への資金流入の動きは続いているが、景気の底打ち感から、投信などのリスク資産にも一部資金が還流しているようだ（図表 12）。

(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。